

高橋裕子著 『明治期地域学校衛生史研究—中津川興風学校の学校衛生活動—』

三羽光彦

(芹屋大学)

本書は、二〇一二年度兵庫県立大学大学院環境人間学
研究科に提出した博士学位論文「明治期地域学校衛生史
研究—中津川興風学校を事例として—」博士（環境人間
学）を加筆修正して、二〇一四年度科学研究費助成（研
究成果公開促進費）を受けて、二〇一四年一月に出版
したものである。

本研究は、「これまでの学校衛生史研究では、明治政
府から地域の学校へという一方向しか見え、地域の学
校現場から明治政府への働きかけや影響については看過
されている」、「学校現場の視点から明治期の学校衛生を
明らかにしたい」（一〇頁）という問題意識から出発し
ている。そして、豊富な史料が残されており、早くから
学校医を設置した岐阜県の中津川興風学校（現、中津川

市立南小学校）を、その事例に取り上げたということど
ある。

*

この学校は明治の創設期から第二次大戦後に至るまで
岐阜県東濃・恵那地域の中心校であり、学制期から近年
に至るまでの、『公文書綴』、『学校沿革誌』、『学校日誌』
など膨大な学校文書を保管している。戦後は、地域に根
ざす恵那の教育と民主教育運動を担った学校の一つでも
あった。

この学校の史料群は、すでに一九六〇年代に、仲
新・伊藤敏行・上沼八郎・久原甫・内田 紘「東海地方
における近代学校の発達（第一報告）—岐阜県を中心と
して—」（『名古屋大学教育学部紀要』第六巻・一九六〇

年)や仲新『明治初期の教育政策と地方への定着』(講談社、一九六二年)でまず着目された。一九七〇年代には、自由民権運動や天皇制公教育の組織化との関係から、梅村佳代「豪農民権地域における民衆の公教育組織化運動について」(『季刊教育運動研究』創刊号・教育運動史研究会・一九七六年)、堀浩太郎「明治前期の小学校をめぐる問題―『興風学校日誌』を中心に―」(名古屋大学大学院教育学研究科院生『教育論叢』第二〇号・一九七七年)などで研究が進められた。

私も今から三〇年ほど前に「岐阜県中津川における自由民権と教育―幕末維新期以降の思想的系譜との関連で―」(岐阜経済大学地域経済研究所編『地域経済』第五集・特集 岐阜の自由民権・一九八五年)と、「近代教育の形成と近世の学問・教養―岐阜県の東濃と西濃を比較して―」(岐阜教職理論研究会『教職理論研究』第一二号(一九八七年))を書いた。今思うとつたない論文であるが、平田国学から自由民権そして天皇制思想へと転回する中津川地域の思想動向にたいする強い関心から執筆したものである。敷衍すれば、民衆レベルの前近代から近代への思想史のプロセスに関心を持ったということができる。それはどちらかといえば、宮地正人『幕末維

新期の社会的政治史研究』(岩波書店・一九九九年)、同

『幕末維新変革史』(上・下、岩波書店・二〇一二年)と通底する問題意識であったが、そのパースペクティブは天皇制公教育確立までを見据えていた。荒っぽい問題意識ではあるが、本書を通読して、今またその問題意識が鮮明に頭をもたげてきた。

さて、この論文作成がきっかけとなり、中津川市立南小学校へ時々かがうようになった。そして、「興風学校日誌」などの史料が非常に貴重な存在であることを、土方苑子先生(当時国立教育研究所、後、東京大学)とともに、同校の先生方に説明し、その史料の整理や研究に協力した。そうするなかで、同校を退職された先生方が中心となり「学校日誌」の解説と翻刻に着手することになった。今から二〇数年前のことであった。この結果現在までに、中津川市教育文化資料委員会編集の形で、『中津川市教育年表』(一八集まで刊行)、『資料 興風学校日誌』(六集まで刊行)が世に出ている。これは恵那の教育を担った先生方による地道な優れた教育研究運動の成果であるといえる。

このように「興風学校日誌」は、私が研究者として立ちを始めた時期の想い出深い史料である。これを十

二分に活用して、このたび高橋氏が学位論文を作成され、こうした立派な学術書を出版されたことは、私にとって大きな喜びである。

本書は、以下のような構成からなっている。

序章―課題と方法―

第一部 学校構想と初期の学校衛生活動―学校創設(明治六年)から明治一二年―

第一章 中津川興風学校の学校構想

第二章 明治初期における小学校の病気欠席の問題

第二部 地域と教師たちの学校衛生活動―明治一二年から明治二四年―

第一章 明治一二年のコレラ流行に対する中津川興風

学校の「閉校」措置

第二章 中津川興風学校と岐阜県私立衛生会の接点

―地方私立衛生会の活動と学校衛生―

第三部 明治政府の学校衛生政策と学校現場―明治二四年以降―

第一章 明治政府の学校医制度―三宅秀と三島通良の

学校医論の比較―

第二章 中津川興風学校の学校医の活動とその意義

終章

註／引用・参考文献

付録 中津川興風学校の学校衛生活動年表―『中津川興

風学校日誌』(明治七―三七年度)を資料として―

第一部第一章では、学制初期に、義校方式で設立された興風学校が、中津川地域の主導性のもとに作られたことを論じている。これまで見過ごされてきた『市岡家文書』(中津川中山道歴史資料館寄託)の「小学校義校設立調査」を始め、五通の開業願書の異同や教員履歴を丹念に解説・調査した点は、教育史研究として高く評価できる。

興風学校の中心教員となった小林廉作についても長野県本曾福島教育委員会所蔵の旧山村家の『家中系譜』まで丁寧に渉獵している。歴史学や教育史出身でない高橋氏には、文字の崩し方が自己流となってくる近世後期の古文書との格闘は苦勞が多かったと推察されるが、それ乗り越え歴史研究として高い水準の成果を上げていることには頭の下がる思いである。

ただ、この第一章は独立論文的な色彩が濃く、「こう

した自治的な学校創設の成功体験は、本書の中心テーマである興風学校の学校衛生活動のベースになったと思われる」(終章)という結論に至るには、まだまだ実証や論証が不足しているように思われる。この点は著者の推論の域にとどまるといえよう。

第一部第二章では、学制期の興風学校で、病欠欠席(五日以上)の場合、学校提出願書に「医案書」(医師作成文書)を添付することを定めていたことを明らかにしている。「医案書」添付は国や府県レベルの規定には見当たらないので、興風学校独自の発想であり、「これは単に欠席理由を分別することを超えて、病欠という理由のために欠席・退学せざるをえない子ども今後の学習や、幸い復学できた後の学校生活に関心を働かせているためではないだろうか」(七七頁)と推論している。

この点に関連して、近世の藩校における病欠や虚弱を理由とする就学猶予が、「他日の挽回を保障したのであり、決して切り捨てられる理由とならなかった」という高木靖文「近世の学校規則における疾病観」(『健康文化』第一号、一九九五年)の指摘は極めて興味深い。興風学校が近世的な流れを汲む内発的・自治的な学校であったことを示すものではないかと思われるからであ

る。この高木論文は本書でも引用されているが、著者は、近世的な病欠・病欠観と近代的なそれとの区別については必ずしも自覚的でないように思われる。

第二部では、明治政府が学校衛生制度の確立に着手する時期の学校現場における学校衛生活動を明らかにしている。このうち第一章では、明治一二年のコレラ流行に対する興風学校の予防対策に関する会議を対象として、その学校衛生観を吟味している。その結果、伝染病予防としての「閉校」措置を、学校独自で決定する方針を設定するなど、学校衛生問題においても学校自治によって決定されていたことを論証している。

ただし、「閉校」措置を興風学校の学校自治と判断する前に、それを取り巻く当時の状況について広く見ていくことも必要ではなかったかと思われる。たとえば、隣の長野県ではコレラが猖獗を極めた明治一二年の八月一日、県当局は各郡役所に「時機ヲ見計ヒ病勢減殺迄各小学校生徒休業」するよう布達(丁第九十号)している。コレラは中山道を東から流行してきていた。馬籠や妻籠などと頻繁に往来していた当時の中津川宿の人々はその情報にいち早く接したのであろう。

中津川のすぐ東は木曾谷から松本まで長野県筑摩郡であった。筑摩郡では、教育雑誌である『月桂新誌』を創刊し、最初の県会議員となった市川量造が衛生委員として、コレラの防疫に全力を傾注していた。その経緯は、長与専斎などの尽力により、公選の衛生委員による自治的公衆衛生制度創設の動きを加速させた。他方、市川は民権結社の奨匡社を設立し、愛国社と連携して国会開設運動に乗り出した。興風学校の学校衛生観には、こうした当時の周辺の情勢が反映されているのではないかと思われる。

第二章では、岐阜県の私立衛生会の活動と県の初期の学校衛生観を明らかにしながら、興風学校日誌を用いて学校現場と私立衛生会の接点を検討している。そして、結論としては、明治三〇年代の学校衛生諸制度実施の前に、学校教員が地方の私立衛生会に参加するなど、内発的に学校衛生問題に対処していたことを明らかにし、この事実は従来の通説の見直しを迫るものと論じている。

第三部では、近代日本の学校衛生制度の創始者とされる三島通良の学校医の考え方を、三宅秀のそれと対比して描いている。三宅は、蘭医・良斎を父に持ち、一五歳で遣欧施設の随員となった明治国家草創期の第一世代の

医学者であった。ベルツの英語塾に学び、最終的に帝国大学医科大学長となり、文部省の学校衛生顧問会議議長を務めた。著者は、この両者の学校医観を比較検討し、「三宅の学校医論が児童生徒の病欠予防と健康維持を中心とするものであったのに対して、三島のそれは、国家のための国民づくりという教育の目的論をベースとし、学校医は学校の衛生視察者、行政的監督者として国家行政の一端を担う役目を負っていた」(終章)と結論づけている。

第二章では、明治三〇年代の学校衛生制度成立期における興風学校の学校医の活動実態、特にこの時期に流行したトラホームに対して、学校医がどのように対応したかを考察している。その結果、当時学校医の職務としては含まれていない治療行為を臨機応変に行うなど、現実のニーズに応えた活動を行っていたことを明らかにし、それは「学校現場が先行し、国家制度を超える活動が実行されていた」(二〇二頁)証左であると結論づけている。

本書には、日本の近代史に深くかわるような極めて興味深い論点が散見される。前述した拙著で中津川の自

由民権運動を調べた時、明治一五年九月から翌年にかけて中津川自由党は十数回にわたって演説会を開催し、小林廉作や林淳一（学校医）が登壇しているが、その演目の多くが世界地理や科学技術や衛生にかかわる啓蒙的なものであった。民権結社の集会で衛生が重視されること、当時私にとって意外ではあったが、本書を通読して（本書には必ずしも明言されてはなかったが）、その意味が少し分かったような気がした。衛生という営為が、近代にとってエッセンシャルなファクターであったことを再認識することになったからである。

以前、近代日本の陸軍特別大演習について少し調べたことがある。ここでもまた公衆衛生がとりわけ重視されている。天皇の行幸との関連といえはそれまでであるが、飛行機など科学の粋を集めた兵器と、徹底した公衆衛生、それらは学校教育とともに近代そのものの象徴であった。いわば誰もが否定することのできない近代の光であった。そしてそれは、それを主宰する国家や天皇への讃仰の根拠となった。

しかしそんな光の中で、ハンセン病や障害者たちが徹底した差別を受け続けたこともまた今日よく知られている。近代と衛生というテーマの光と影は深い。本書で著

者は、「衛生と教育の発想および自治意識と、全国各地の自由民権運動・思想との関係は非常に興味深いテーマである」（二〇二頁）と述べている。そのあたりに、この謎を解く鍵が隠れているように思われる。

いずれにしても本書は興風学校という一事例を中心とした論文である。歴史研究における事例研究は基礎的な作業として重要であるが、事例は一つの「事実」を明らかにするに過ぎない。今後は日本全国あるいは海外の事例研究を深めるなかで、近代と学校衛生史の関係の「真実」に迫ってほしい。

（学術出版会、二〇一四年一月刊）